

人間学類における教養教育としての 人体生理学

竹田一則
心身障害学系助教授

はじめに

「からだの教育を考える」という本特集は、学群課程で必修の外国語、情報処理、国語につづく科目「体育」について考える企画とのことなので、本稿の内容が的外れの不安もあるが、人間学類において「人体生理学Ⅰ」という科目を担当している経験を踏まえ、学類で行っている「からだの教育」について考えてみたい。

「からだの教育」とは

本学出身の自分自身の20余年前の体験から恐縮だが、私が本学で受けた「からだの教育」は、当時1～4年次まで必修科目として履修が義務付けられていた科目「体育」と医学専門学群における専門教育のそれである。体育系のサークルに所属していた私にとって、授業の「体育」は様々な種目を体験する楽しいひとときであり、ボート、ヨット、スキー、

スケートなど、およそ‘授業’のイメージとはかけ離れた種目を専門家のもて履修できるカリキュラムを堪能し、そこに必修という義務感や教養教育の一部であるといった実感は殆ど無かった。

一方、医学専門学群における専門教育は、現在の自分の専門を形成する過程そのものであるもので、本学で受けた「からだの教育」体験の主要部分を占める。特に鮮烈に覚えているのは、学群2年次に受けた人体解剖実習である。それは大学入学後間も無い多感な青年期に、実際の人体解剖を通じ、その構造についての教育を受けた初めての機会であったためであるのは言うまでもない。当時、解剖実習を受講しながら、その‘人体’の生前に思いを巡らせたことや、献体された‘人体’に対する尊厳について実習仲間と議論したことなど、20年以上経った今でも自分の原点となっている。振り返ってみれば、すべての修了生を医師という

‘人体’の専門家に養成するための「からだの教育」は、その目的も学生に要求される到達点も極めて明確であり、カリキュラムの中で常に先に進むための必要条件として厳格に位置づけられていた。

人間学類における「人体生理学」

先にも述べたように、現在私は人間学類で、主として心身障害学主専攻の学生を対象として「人体生理学Ⅰ」という授業を担当している。

人間学類に在籍している学生は、2年次より「教育学」、「心理学」、「心身障害学」の三主専攻に分かれる。人間学類の名称の由来になった様に、いずれも人間に関わる専攻分野であるが、特に私が関わる「心身障害学」を主専攻とした学生は、専攻に進んだ後、様々な障害を持った小児や成人についての疾患の学習や実習などのカリキュラムが編成されている。具体的には、自閉症などの知的発達や行動情緒的な問題、脳性麻痺などの運動発達における障害、言語障害、聴覚障害、視覚障害、その他の慢性疾患など数多くの病態を理解してその対応を学ばなければならない。学生は学内外で実際の患児や患者と接する機会も多く、また卒業後に教育や医療の現場、行政機関等において障害児者に対する教育や臨床、福

祉、行政に関わる職種に進路を求める者も多い。したがって、人体に関する構造や機能を学ぶことは、もちろん一義的には、専門教育の理解を可能にする基礎としての位置づけである。一方で、近年の傾向として、必ずしも専攻で学んだことと関連のない一般企業や一般行政職などへの就職を早くから希望している者も相当数いるのが実情である。そのような学生にとっては、後述の他専攻の学生同様、はじめから一般教養として、人体の構造や機能に関する科目の履修を希望していると考えられる。

「人体生理学Ⅰ」は、私が人間学類で担当している生理系の科目の中で最も基礎的な内容のものである。主専攻カリキュラムにおいて、この授業に与えられた役割は、1学期間で人体の構造と機能を概説するというもので、担当した当初は、授業の到達目標と進め方で随分と頭を悩ませた。本授業の大多数の受講生にとって、受講前の人体に関する知識は、高校の「生物」程度であるので、そこからどの様に専門的知識の獲得に最低限必要な水準に、興味を發展させ得るかというところに苦慮している。人体の主要器官の構造、機能、主な病態などについてのスライドを使った概説、関連したVTRの視聴などを行うと、1時限の75分でま

とめるのが一区切りとしてはなかなか困難である。

本科目は一応人間学類において、主に「心身障害学」主専攻の学生を念頭に開設されているわけであるが、特に他専攻からの履修の制限等は設けていない。平成13年度で成績評価を行った実質的な受講生は93名で、その内訳は、人間学類37名、生物資源学類18名、生物学類10名、工学基礎学類8名、工学システム学類5名、自然学類3名、体育専門学群3名、情報学類2名、医学専門学群、人文学類、比較文化学類、社会学類、国際総合学類それぞれ各1名、その他博士課程の大学院生2名で、例年約100名前後の受講生のうち、過半数が授業開設当初は予想しなかった他学群、他学類の学生による履修である。このことは、上述したような、将来必ずしも障害児者とかかわらない進路に進むことを希望している専攻学生とともに、多くの他専攻の学生にとっても、教養としての人体の構造や機能といった「からだの教育」に対する学問的興味の高さを伺わせるものと考えられる。

教養教育としての「からだの教育」

話は変わるが、平成3年(1991年)の大学設置基準の大綱化により「一般教

育・専門教育・体育その他」の科目区分に対する制限が緩和され、多くの大学で教養、専門教育のあり方が再検討され、教養学部の改組が実施された。本学でも教養教育のあり方まで踏み込んだ共通科目の改革や見直しが精力的に行われ、またその成果についての評価検討も多くなされている。それから10年が経過した今、我国では大学生の顕著な学力低下が明らかになり、科学立国として国際競争力の将来が危惧されている。また、その様な状況を引き起こした原因として、初等中等教育における学習指導要領が掲げる「ゆとり」に対する懸念が広がり、一方で、改めて大学における教養教育のありかたが注目されている。

私は大学設置基準の大綱化前後での本学学生における気質の変化等を論じる立場には無いが、本学では自身が入学した20余年前から、すでに総合科目に代表される教養教育の充実や、専攻を越えた履修が可能な弾力的なカリキュラムがその特色であると謳われていた。それによって学生は自分の専攻とは直接関係ないが、興味のある分野の講義を受けることができ、教える側にとっても良い意味での緊張感が保たれている様に思われる。

さて話を「からだの教育」に戻すが、教養としての人体の生理や病理の正しい

知識は、どのような健康教育にも勝るとも劣らない。詳細は省くが、私の研究室で昨年度に行った本学の学生約300人を対象とした健康意識に関連した調査では、未成年の本学1年生の約1割以上が喫煙を習慣的に行っており、2年目以降はその割合は男女とも急激に増加していること、また未成年喫煙学生やヘビースモーカーの学生は、それ以外の学生に比べて、飲酒習慣や食生活といった自分の基本的健康管理全般において関心が低い傾向が明らかであった。先日あるニュース番組で、関西の某一流国立大学の学生たちが作った、ある種の「きのこ」を摂取して幻覚症状を楽しむ、というサークルが堂々と紹介されていた。法の不備により取り締まり対象となっていない事もさることながら、己の無知が故に、人体に対する影響の不明な麻薬類似物質を摂取して、カメラの前で「合法で無害」「楽しい」といつて憚らない主催学生を哀れに思うと同時に、貴重な我国の将来の人材の、未熟な故のあまりにriskyな行動を、自己責任の名のもとに無関心に放置するその国立大学の姿勢に呆れるばかりであった。科学的、論理的なevidenceに基づいた教養を、生涯を通じて自ら深めていくことのできる能力、本物と偽物を見分ける見識、これを与えることが古典

的な言い回しではあるが、‘最高学府’における教養教育の重要な使命ではないだろうか。

おわりに

大袈裟に聞こえるかもしれないが、「からだの教育」とは‘己を知る’という人間としての根源的な教養教育に他ならない。一方で、大学生の学力とは何か、教養とは何か、という定義は大変難しい。いずれにしろ、今日の大学を取巻く環境として、学部や学群の教育よりは大学院優先、教官の教育業績よりは研究業績重視、という競争原理にもとづく改革プレッシャーは日増しに強くなりこそすれ、変わることはないであろう。その是非はともかく、何れかの組織が創造的人材を世に送りだし続けることが、我国の今の閉塞状況を打破する必須条件であることは明らかである。あの「万能の天才」レオナルド・ダ・ヴィンチは、人体構造の理解を極めるために、当時の社会が到底受け入れ難かった人体解剖に専念し、その情熱と知見の集積があつた創造的な名画「モナリザ」に昇華した例はあまりにも有名である。豊かな創造性は、常に幅広い教養とそれを求める自ら湧上がる欲求の産物であつて、‘まず競争ありき’では真の創造性は育まれ無いのかもしれ

ない。

私がたまたま担当している一つの科目を通していても、他専攻からたった一人でも選択し、受講し続ける学生のモチベーションは非常に高い。自ら何かを考え、調べ、速路はるばる専攻外の講義を一人で受講する、そういう学生を大切にしたい。

(ただかざるのり
小児アレルギー内科学専攻)

参考文献

筑波大学教育計画室 (1993年)「筑波大学の大学設置基準大綱化に伴う新カリキュラムへの移行状況と教育の自己点検・評価体制の整備」平成4年度教育方法等改善経費プロジェクト

筑波大学教育計画室 (1997年)「教養教育の実施体制と科目内容の改善」平成8年度カリキュラム改革調査研究経費プロジェクト

